

十分、ひとりで生活してやる、  
と意気込んで大阪へ。元来、  
店屋物が嫌いな私は自分で  
作るハメに。何を作るのも女房  
に電話、何を買えばいい、  
火加減、塩加減、さじ加減……。  
さすがに女房もあきれ、  
「これじゃあ単身赴任でなく  
て、半身赴任ね」と笑われる

「たまにかかる電話で、今日は、何を食べたの?」てな話に小料理メニューを並べると、「あら、いろいろ作れるとうになったのね。今度私にまでよ」とのたまう。

黎明に起きる。硯に水滴を落とし墨をする。墨の香りが部屋いっぱいに広がる。墨をするのに倦むと床の間を眺める。旧友が贈つてくれた香蘭社の「瑠璃蘭」の壺は、さすがに有田焼の名品、1個で床の間を圧する。だから、掛け軸は飾らず、雲水がかぶる笠を掛けた。

处处々に鳥の声がして夜が明けた。習字道具を片付けて、自室の座敷の障子を開ける。濡れ縁があり、小さな庭がある。さてさてと、手をこする。3段の棚に並べた盆栽。黒松、梅、藤、木瓜、ひめりんご……。わたしは、ひとの手においがするものよりは、大樹の風格のあるものを好む。ところで、きょうは、盆栽の世話ではない。庭造りのほうだ。庭には武藏野らしく、檸の大木がある。その相元に、古道具屋で見つけた電見灯籠を置いていた。その里辺を整地して、用意しておいたシダと苔を植え付けていう、というのだ。

わたしは一番好きな庭は福岡県太宰府にある「光明寺」の苔庭。そこ茶室のじり口から、裏山を借景にした苔庭を眺めれば、自身がその庭の岩になつたかのようになる。それでも、見られる庭になるのは来年だらう。

「10年前のこと。豪州税務の折、クインズランドコットン社の綿花商ドールアルバ氏に尋ねた。

『買い付けた綿花を輸出する迄のヘッジはどうしているのか』『米国ニューヨーク綿花市場を利用してい

る』

「NY市場が開いているのは、こちらが夜の間ではないのか』『そうだ、時差が14時間だから、注文を向こうのF.C.M(商品取引員)にあらかじめ出しておくが、相場が変動する時期は、夜中に電話を入れることもある。大変だよ』

「日本では綿花ではないが綿糸の先物取引をやつて

いるよ」「知らなかつた。その市場に流動性(Liquidity)はあるのか」「最近は出来高・取組高ともあまり多くはない」「それは残念だ。日本との時差は1時間だから、利用できれば良いのに」商品先物の命綱は流動性。取引は流動性の高いところに集まる性格がある(先物ジャーナル7月19号めらの目)。

**東穀取会員懇親会**

上場話題に盛り上がる  
東京穀物商品取引所は10月5日、所1階ホールで、恒例の会員懇親会を催し、関係者約285人が参加した。ホールの壁面には、前日のコメ上に向かってのセミナーで使った米穀先取引の歴史を物語るパネルがそのまま残され、農林水産省の田辺義貴商品取引監理官が「コメ上場への関心、インパクトは強く、有意義なこと」と挨拶するなど、コメの話で盛り上がった。



エメ上場話題に盛り上が

卷一百一十一

最近の原油相場の高騰などから、商品投資への関心が世界的に高まっているようです。

商品投資の特性が広く認識されたのは、1987年のブランクマンデーの時です。株式投資が損失となる中、商品ファンドは収益を上げ、商品と株式の逆相関関係が関心を集めました。そして、最近、米国の中有名大学が商品指数と株などとの逆相関を実証した研究結果を発表しています。

一方、中国、インド等の経済成長により長期的な商品相場の上昇が予測されるなどから、世界の投機マネーが商品に向かう動きは長く続くと言われています。

委託手数料の完全自由化や商品取引所法の改正など、商品取引員経営にどうして乗り越えなければならないヤマがありますが、商品投資の特性が広く認識されつあること、そして、世界経済の潮流を見据えるならば、このヤマを乗り切れば商品先物業界には明るい未来があると言えるのではないでしようか。

島。一人生き残ったことに罪悪感を抱いて、恋に踏みこめない娘。何とか娘に幸せになつてもらおうと奮闘する父親。2人の深い愛情が物語の核となっています。そして、その背景で静かに語られるのが、原爆の悲惨さ、戦争のもたらす悲劇です。原爆は一瞬にして30万人以上の死傷者を生みだしました。その一人ひとりに家族があり、語られるべき人

郎  
  
オリンピックを熱く中継する一方、くり返される戦争の悲劇を映しだしました。  
オリンピック発祥の地、古代ギリシャからでも2,000余年。人間は歴史から何も学んでいない、それが人間の最大の悲劇かされないと痛感せざるを得ません。  
涙腺を大いに刺激されますが、ぜひお勧めしたい映画です。

夏が過ぎて

專務 菊池 良弘



原  
点

常務 金森 正明



文房四宝

取締役  
五



**拜見**  
**岳父の翻訳本**

木原さんは新聞記者から先物業界に入つたが、岳父の中山成基もまた新聞記者だった。徳富蘇峰が創刊した

主  
藤田  
日本  
大

鑽を積みつゝある人であつて、かつ語学の素養に富み、こうしたものを見翻訳する人としては、最も適材適所の感が

谷藏理事等が序文を寄せて  
いる。欧米の取引所事情に  
精通していた藤田課長もこ  
の原本の存在は知らなかつた  
ので驚き、こう述べている。  
「日立東京米穀商品取引」